

## ま え が き

2016年の7月から11月にかけて、クアラルンプールのペトロナス・ツインタワーに程近いギャラリーで「マハティール時代」と題した現代美術の展覧会がおこなわれた (<http://www.ilhamgallery.com/exhibitions/era-mahathir/>)。

マハティール・モハマドが首相を務めた1981年から2003年までのあいだ、マレーシアの人々は急速な工業化と経済発展を経験したが、この時代はそうした社会経済的変化に対する批評としての美術が栄えた時期でもあったという。たしかに、都市化とともに移りゆく景観を批判的なまなざしでとらえた作品が多かったように思う。この時代の抑圧的な政治と、それへの抗議を暗示する作品もあった。ただしいずれも理知的な印象を与えるもので、感情よりも知性に訴える作品であるように思われた。結局のところ、マハティール時代はすでに過去として冷静に回顧される対象なのである。なによりもマハティール自身の行動が、時代の変化の激しさをよく表している。展覧会期間中の最後の週末、マハティールは新たに結成されたばかりの野党の指導者として、ナジブ・ラザク首相の退陣を求める街頭デモに参加していたのだから。

では、現在われわれが目にしていくポスト・マハティール時代とはどのような時代なのだろうか。かつてマハティールが先進国入りの期限目標に設定した2020年が近づき、マレーシアはどんな地点にいるのか。

政治面では、変化の激しさこそポスト・マハティール時代の特徴である。2014年の夏に本書の企画案を書いた時点では、マハティールが91歳で新党を立ち上げ、かつて自身が投獄した政敵と手を組んで野党連合の代表になるなどとは想像すらできなかった。本書では、政党間の関係性の変化のほか、政治にかかわる制度、有権者の意識、市民社会の動向など、多方面で生じた政治的变化を把握し、その要因を推察する。

経済的には、1990年代末のアジア通貨危機を経てマレーシアは安定成長期に入った。しばしば「中所得国の罠」に捕らわれていると指摘されるものの、ポスト・マハティール時代も5%前後の成長が続いており、高所得国の仲間入りを果たすのは時間の問題である。成長と分配のバランスを政府はどう図ってきたのか、その現状と課題を把握することが経済面での本書の焦点である。

本書は、2015年度から2016年度にかけてアジア経済研究所が実施した『ポスト・マハティール期のマレーシアにおける政治経済変容』研究会の最終成果である。アジア経済研究所では、マレーシアの政治経済を総合的に検討する研究会を数度にわたって実施しており、今回はマハティール政権期を扱った前回研究会以来、11年ぶりの研究会となった。なお前回研究会の成果は、鳥居高編『マハティール政権下のマレーシア——「イスラーム先進国」をめざした22年』（アジア経済研究所、2006年）として刊行されている。本書とあわせてご覧いただけたら幸いである。

前回研究会の委員だった中村と熊谷が、今回はそれぞれ政治篇と経済篇のとりまとめ役を務めた。諸先輩が築いた伝統をきちんと引き継げたかと問われれば心許ない。それでも、学術研究としての基準を満たしたうえで社会の情報需要にも応えられる本にするべく力を尽くしたつもりである。

本書の執筆にあたり、多くの方々から助言をいただいた。研究会主査の中村と鷺田任邦委員、鈴木絢女委員の3名は、本書所収の論文に関してアジア政経学会2017年度春季大会で報告する機会を得、討論者の金子芳樹先生（獨協大学教授）から貴重なコメントを頂戴した。また出版にあたり、2人の匿名査読者から多くの有益な指摘をいただいた。編集・出版アドバイザーの勝康裕さんからも多くのアドバイスをいただいた。記して謝意を表したい。

2017年9月

編 者